

3.1独立宣言から100年、渾身のドキュメンタリーを再び！

2019年 韓国レジスタンス映画祭招待作品

記録映画 ◆ 戦後在日五〇年史

在日

1997年作品

The Story of Koreans in Postwar Japan

98年度日本映画ペンクラブ（ノンシアトリカル部門）一位入賞作品
98年度キネマ旬報ベストテン（文化映画部門）二位入賞作品
99朝日ベストテン入賞作品

やがて時がくれば
どうしてこんな事があるのか
何んのために
こんな苦しみがあるのか
みんな分かるような気がするわ

チエーホラ「三人姉妹」より



2019 9.6 fri 北沢タウンホール



午後3時開場 3時30分開映～歴史篇(135分)

午後6時開場 6時30分開映～人物篇(123分)

午後8時50分～アフタートーク：足立正生
「呉徳洙青年が大島渚監督と出会ったところ」

■入場料 前売 800円/当日 900円
(完全入れ替え制)

《北沢タウンホール〇アクセス》

東京都世田谷区北沢 2-8-18 / TEL: 03-5478-8006

●電車 小田急線下北沢駅 徒歩5分

京王線の踏切下北沢駅 京王中央線 徒歩5分

●バス 小田急バス「北沢タウンホール」

系統下61(駒沢陸橋～北沢タウンホール) 終点

解放から50年一。

半世紀に及ぶ在日の軌跡を

「在日」の視点からつづる一大歴史叙事詩

制作●映画「戦後在日五〇年史」制作委員会

企画●在日韓国青年商工人連合会 OH企画

指紋カードをなくせ！1990年協議会

プロデューサー●金昌寛 陣内直行 野口香織

監督●呉徳洙

撮影●本田茂 石倉隆二 篠田昇 助監督●金聖謙

録音●本田孜 辻岡一郎 東京サウンド企画 福屋音響

音楽●野沢美香 南淑子 ナレーター●原田芳雄

協力●アメリカ国立公文書館/プランゲ文庫/

第一生命/国立国会図書館/日本近代文学館/

津田塾大学図書館/中日映画社/新井英一事務所/

日本テレビ/学徒義勇軍ソウル同志会/

光州市立美術館/酸ヶ湯温泉/駐日大韓民国大使館/

駐日アメリカ大使館



●映画「戦後在日五〇年史 [在日]」の証言者たち(本編より一部抜粋)



「やはり思いはトンイルですね。統一になったら、うちの孝子ちゃんが行ったり来たり出来るもん」(鄭秉春 Cheong Byoung Chung/在日一世)



「消しても消しても消せないのが故郷。自分の生まれた所は消せないんですよ、その有り難みというか——」(河正雄 Ha Jeong Woong/在日二世)



「余りにもいろんなものが多すぎて、何故このような状況になったのか一度整理してみる必要があると思う」(朴慶植 Park Kyung Shick/朝鮮近・現代史研究家)

歌「清河への道」で自らの在日の彷徨と軌跡を見事に表現した新井英一、この二人は共にこの地で生をうけた在日二世である。さらに、テレビ局の報道カメラマンとして現場を駆けまわる玄利日、陸上十種競技でオリンピック出場に希望を馳せる金尚龍、「にあんちゃん」の作者・安本木子の娘で、海外での農業を志す李玲子は母の故郷・大鶴炭鉱跡を訪ねる。彼等はみな次代をにうた在日三世である。この映画「在日」は戦後50年のさまざまな事象を描写しながら、「在日の軌跡」を映像化するという壮大な試みに、初めて真正面から挑戦した作品である。



「在日の根本的悲劇の原因は我々がかくありたいという主観的願望とそれを成し得る主体的能力とのギャップでしょ？」(金奎一 Kim Kyu Il/在日同胞の生活を考える会代表)



「在日同胞の権益・権利運動で、唯一勝ったのは指紋解除拒否の運動だと言えるくらい、広範に日本社会の共感と支持を得たんですよ」(韓宗碩 Han Jong Seok/在日一世)



「母の故郷には、「にあんちゃん」に出てくる長屋の様子は何も残ってなかった。私は母の生まれ故郷に立ち、心の中で母を見つめていた」(李玲子 Lee Ryeong Ja/在日三世)



「北に向かってチュサをし、拜み、声を出して哭く民族は我々同胞ですよ！ それを見た場合この50年は何んやったのか！」(朴憲行 Park Heon Haeng/元兵庫建青盟員)



「ぼくたち小さい時から何かにつけてイビられてね、虐げられて、テメエら朝公が何んだと——」(金嬉老 Kim Hi Ro/在日二世)



過去と未来をつなぐ在日の思い



「僕らがやってきたその何倍もスゴいことを親たちはやってきてますよね。その匂いを少しでも「清河——」の中につぎ込んで次の世代に残していきたいかった」(新井英一 Park Yeong Il/在日二世・歌手)

「関門海峡。その昔、釜山と下関を結ぶ開釜連絡船が通っていた海峡である。在日はこの海峡から始まった」(本編ナレーションより)

【映画「在日」に寄せられた各氏からのメッセージ】

土本典昭 (映画監督) ●「五〇年に一本生まれ得るかどうかという傑作である。どの登場人物の肩にも触れたいようなカメラ・アイ。明日の仲間を受け止めようと、手を広げてうねっているような映画だ。この映画を見るか否かで、われわれの「在日」の見方が左右されると言っても過言ではない」

大島 渚 (映画監督) ●「ベネチア映画祭へ審査員として招かれた時、そこで見たほとんどの映画が、本来の土地を離れて生きる人々を描いていた。そこで私は、「世界は難民と移住者の時代だ」と書いた。「在日」は決して日本にいる彼らだけの物語ではない。私は映画「在日」は、「在日」を見るわれわれ日本人と「在日」の人々に根本的な自らの眼の変革を迫るものであると見た」

金石 範 (作家) ●「映画「在日」は戦後半世紀に及ぶ在日朝鮮人の歴史と存在を、幾世代を重ねて重層的に、そして日本全国、さらに海外へ足を伸ばして一つの立体的な全体像を作り上げた作品で、記録映画にとどまらず、すぐれた芸術性を獲得した傑作である」

尹 學 準 (法政大学教授) ●「映画「在日」は私たちを在日にとって、自身を写しだす鏡であり、これからこの地で生きていく上での、私たちのまとない道しるべとなる貴重な資料となることでしょう」

森崎和江 (作家) ●「お一人お一人の「在日」の山河はわたしの鏡。気付かぬわたしの背中が映ります。どうかわたしよ、同じ地球時間を生き合う「在日」の明日へと、わたしの明日がまっすぐに響き合えま

すように……。」

梁 石 日 (作家) ●「戦後五十五年の中で在日はさまざまな形で語られてきたが、映像として真正面から向き合ったのは、呉徳洙の記録映画「在日」がはじめてである。その真摯な眼差しは世代を超えてわれわれ「在日」の未来に希望と勇気を与えてくれる。そしてこの映画は、これからの百年史、二百年史の貴重な資料となるだろう」

原田芳雄 (俳優) ●「優れたドキュメンタリーは優れたフィクションでもあります。映画「在日」の中で呉監督は解釈、注釈を付与せず、この映画証言から立ち上がってくる観るもの一人ひとりの想像力に委ねます。またそれはチョロチョロくすぶりはじめた記憶(歴史)の除外や都合の良い選択、捏造、浄化への表象でもあると思います」

崔 洋一 (映画監督) ●「この映画の圧倒的な力と面白さは、クロニクルにあるのではなく、歴史のねじれの中で果てしなく素朴な欲望に満ち満ちた人々の顔の存在にある。その欲望とは生きることへの絶対的な希求であり、存在とは呉徳洙や僕や無数の矛盾を恐れぬ未明の創造者たちである」

内海愛子 (東京女子大学教員) ●「日本は今、他民族が共に生きる社会のあり方をさぐっている。「在日」朝鮮人は、苦難にみちた「共生」の歴史を生きてきた。21世紀の「他民族共生」への模索は、そこから始まる。待望のビデオ化、若者たちと語り合う場がまた豊かになる」